

研究ノート

家庭の築き方

—19世紀フランスにおける新婚夫婦の生活設計—

末 広 菜 穂 子*

はじめに

前稿⁽¹⁾では、労働者階級に属する若い未婚女性を対象として書かれた家政指南書『家庭の幸せ (*Le bonheur au foyer domestique*)⁽²⁾』をもとに、19世紀フランスにおいて理想とされた主婦像と家庭像を探った。そこで明らかにしたことは、この階級の女性たちに対し、家庭の主婦として求められる経済的・道徳的責任がますます重くなっていたこと、労働者としての女性、家庭の主婦としての女性、というこの階級の女性が否応なく背負わされた二つの立場は、両立をめざしつつも矛盾し合う複雑さをすでに示していたことである。主婦修行を終えて成長した主役の二人の娘が、それぞれよき伴侶と結ばれるハッピーエンドでその家政書は終わり、読者である若い女性たちに、未来への胸はずむ希望と期待を抱かせるものとなっている。しかし、新しい家庭を第一歩から築いていかねばならない若い女性たちにとって、現実には、人生の厳しい試練はそこから始まるのである。

本稿では、新しい人生のスタートを始めようとする新婚夫婦がどのように生活を築いていくべきなのかという、先の家政書のまさに続編ともいえるべきテーマを扱った家政書、『幸せな夫婦 (*Un ménage heureux*)⁽³⁾』を取り上げる。この書は1887年

* 広島経済大学経済学部教授

(1) 末広菜穂子「アンリエットとジャンヌ、それぞれの主婦修行—19世紀フランスの家政書から—(I)」、『広島経済大学経済研究論集』、2002年6月、および 末広菜穂子「アンリエットとジャンヌ、それぞれの主婦修行—19世紀フランスの家政書から—(II)」、『広島経済大学経済研究論集』、2002年12月。

(2) Piétrement, Maria, *Le bonheur au foyer domestique, livre de lecteur courante pour les jeunes filles*, Paris (Garnier Frères), 1891.

(3) Madame E. Guihéry, *Un ménage heureux, exemples et préceptes d'économie domestique*, Paris (Ch. Delagrave), 1887 et 1891 (2^{ème} édition).

12月25日にランスで開催されたコンクールで118編の応募作の中から選ばれ、同年パリで出版されたものである。3,000フランの賞金を懸けて行われたこのコンクールの目的は、「労働階級に家庭経済の原理と家族義務の遂行を普及させ、それらについて関心を起こさせ、最もつつましい家政におけるそれらの遵守を助ける」こと⁽⁴⁾であった。中・上流階層の主婦を対象とした、レシピ紹介中心の伝統的家政書とは異なる、庶民向けの平易で実際的な家政書のテキストが求められたのであった。『家庭の幸せ』も同じくランスで賞を得て出版されたもので、書簡形式をとる手法が凝らされていたが、この『幸せな夫婦』の方も、賞を得ただけあって、従来の家政書とは異なる工夫をもって書かれている。まず大きな特色としては、『家庭の幸せ』と共通するところだが、物語風の構成をとっていることであり、結婚を決意した若いカップルによる新世帯の準備、結婚後の日常生活、子供の養育、家の住み替え、老親との関わりなどの顛末が時間を追って語られていく。序文によれば、この書が対象とする読者は、労働者階級に属し結婚を間近に控えた婚約中の女性である。その読者の誰もが近い将来自ら体験することとなる様々な問題にどう対処するかを、新米主婦の物語として追いかけていくことができるように仕立てられているのである。物語風の展開は、親しみやすさ、読みやすさという読者への効果を生み、新婚夫婦が体験していく問題を具体的に取り上げることによって、読者の女性が漠然と夢の中に描く家庭や主婦についての理想像を、より現実に近い形のものに近づけている。

さらに、この家政書の特色は、現実味を帯びた筋立てだけにあるのではない。注目すべき特徴は、家計のやりくりに関してとりわけ力点を置いているところである。19世紀は、社会の各階層の家庭において経済的秩序の維持、すなわち家計の管理——とりわけ支出の管理——の重要性が強調された時代であり、特に19世紀後半の主婦向けの家政書においては、家計管理の項目が一定の紙幅を占めることが当たり前になってきつつあった。すなわち、少なくとも日常的な家庭の消費を管理することが、主人たる夫ではなく主婦たる妻の責任となっていったわけである。とはいうものの、当時の多くの家政書の家計管理についての記述は、家計簿の記帳法を指南し、通り一遍に節約を奨励するものでしかない。『幸せな夫婦』では、新婚時から

(4) *Ibid.* p. 4. 従って、この書もまたこの時期出版された他の多くの家政書と同じく、ブルジョワジーから見た理想の労働者階級家庭のあり方を示すものにほかならない。この家政書の著者である Madame E. Guihéry については一切情報が不明であるが、新米主婦ジュリーに助言を与えるジュリーの元雇い主、エスパンジェ夫人に自らをなぞらえているのではないかと思わせるところが、記述の端々にうかがえる。

熟年時に至るまで、夫婦のたどるライフコースに沿って、折々の家計について具体的な数字が紹介され、他の家政書とは重点の置き方が明らかに違っている。細やかな家計管理が労働者家庭の家政を成功に導くのに重要であることを、著者は特に意識して伝えようとしているようである。この小論では、この家政書をもとに、当時の労働者階級の若い娘たちに与えられ、期待された「家庭経済の原理と家族義務」とは何なのか、そこに提示された家族生活のモデル、その生活設計にどのようにそれらが反映されているのかについて考えたい。

1. 労働者家庭の理想モデル

『幸せな夫婦』は主人公夫婦のたどる物語がその主要部分を成しているが、主婦の使用した支出帳とその覚え書き、料理や薬、洗剤、洗濯法などの有用なレシピ集、家族に関する家長の記録簿などが付録としてそれに添えられている。

この家政書の主人公はジュリー。農家の娘だが、町の製糸工場主の家で小間使いとして働いて8年、25歳になる。幼なじみで3歳年上の製本職人アンリ・ベルナルとの結婚について、雇い主のエspanジェ夫人にジュリーが相談するところから話が始まる。エspanジェ夫妻は若いときからの様々な苦難を経て今の身代を築き上げ、6人の子どもを育てた苦労人である。賢く思いやり深い夫人は使用人にとって理想的な主人であり、ジュリーは夫人のお下がりの衣装や装身具がもらえるので、これといって不自由することのない今の生活に満足している。そのような居心地よいエspanジェ家を離れ、僅かな日給に頼るしかない労働者の妻として新しい生活を始めることに対する不安はジュリーにとって大きく、好意を抱くアンリとの結婚をためらわせていた。別に、財産のある農家の息子との縁談も同時に持ち上がっており、それもジュリーの悩みを深めていた。

エspanジェ夫人に励まされて、アンリと半年後に結婚したジュリーは、アンリの勤め先に近い郊外の新居で新しい生活を始める。二部屋に屋根裏部屋があるだけの小さな借家だが、ささやかな庭もついていて、野菜や果物も栽培できる。アンリはヴェルマンサン氏のアトリエで朝6時から夕方6時まで仕事をし、家でもちょっとした内職仕事を引き受けて稼ぎを増やしている。新米主婦ジュリーも、失敗を経た後に賢明な節約法を身につけ、洗濯や針仕事の内職も始めて家計を助ける。1年後、二人には長女が生まれ、さらに2年後のクリスマス・イヴの日には長男が生まれる。子どもの養育で出費が増え、苦しくなった家計を補うために、ジュリーは家で行える洗濯の仕事を増やし、庭で作った花や野菜を町に売りに行くことにした。4年のうちにさらに二人の子どもが生まれて家族人数は増えるが、勤勉そのものの

ベルナール夫婦は貯蓄を減らすことなく、順調な生活が続く。結婚後7年目に、アンリは、10歳で徒弟に入って以来25年間にわたる精勤が認められ、職工長に昇進することとなる。一家は大きな家に移ることにし、それを機に、年老いてきたアンリの父、寡婦となったジュリーの母らが同居することとなって、ベルナール家はさらに大世帯になる。体が弱って病いがちな年寄りを抱えて、負担はいっそう増えるのだが、子どもたちの協力もあって、ベルナール一家はさまざまな日常の苦労や危機を乗り越えながらも、危なげなく年を経ていくこととなる。

結末には、新居に移って11年後のある日の一家の様子が描かれている。老親たちはますます老いが進みはしていたが、穏やかに日々を過ごし、4人の子どもたちも成長して、長女のロゼットを始めとして3人の娘たちは母の仕事を手伝い、長男は見習い期間を終えて家具職人として立ち立ちしようとしている。上の二人の子どもはすでに家計を助けるまでになった。ジュリーの洗濯業は、ロゼットのアイデアで各種の衣服やレースなどの修繕も併せて行うことになり、大繁盛である。娘たちの手だけでは足りず、人を雇うまでの利益の多い事業になった。こき使うことなく仕事を丁寧に教え込んでくれるので、近隣の母親たちはジュリーのもとに娘を喜んで働きに行かせるのだった。家長として一家を率いるベルナールは、50歳を迎えるまでにまだ少し間がある男盛りである。しかもその日の朝、長年の支払いを終えて、念願であった家の権利書を手に入れたところであった。四季折々バラの花が絶えることなく咲くために、「ラ・メゾン・デ・ローズ」と人々から呼ばれるようになった美しい家の所有者に、晴れてなることができたのである。

朝から晩まで真面目に働き、妻の手料理と自家製のビールを味わうことを楽しみにしている夫。頑丈な身体と澆刺とした精神を一刻も休ませることなく立ち働く利発な妻。両親の言いつけをよく守って勉学に励む傍ら家業も手伝い、年とった祖父母の面倒をこまめに見る思いやりに満ちた子どもたち。子どもに一方的に面倒をかけることを潔しとせず、非力ながらも一家の役に立とうとする老親たち。貧しいながらも愛情によって結ばれて結婚し、互いに支え合って、子どもにも恵まれ、経済的にも成功するベルナール夫婦の物語は、端的に言ってしまえば、理想的すぎるほど理想的な労働者家庭のモデルである。理想の主婦として描かれるジュリーは、この書の巻頭辞に掲げられた「よく働きよく気がつく女性のもとではすべてが栄える」という言葉そのままの女性である。家政や家計のやりくりに関する主婦ジュリーの提案は、夫アンリの快い賛意を直ちに得る。根っから真面目なアンリは、労働者階級の忌むべき悪癖とされた飲酒癖とも無縁で、家計を助けるために煙草代も節約しようと自ら申し出るほどである。

ベルナル家を取り巻く人物群もそれぞれ典型的な性格を与えられている。一家を見守りなにかと助言や助けの手を差し伸べるゴッドマザー役の元雇い主夫人。読者の共感を得られるようなアドバイザーの役割にふさわしく、エスパンジェ夫人は、小さな商家の娘で、工場労働者と結婚し、破産した実家の借財を返済するために、夫と共に多くの苦労を重ねて6人の子どもを育て上げる女性として描かれており、単なる有閑のブルジョワ婦人ではない。苦難を経てきたからこそ、現在は裕福な暮らしを享受するにふさわしい報いられるべき成功者なのである。それに対峙して、アンリより稼ぎの多い夫を持ちながらジュリーに無心をしに来るだらしない隣の主婦や、派手好きで家事下手で浪費家の義理の従姉妹などが、好ましくない生活者を体現する形で登場している。ジュリーが献身的に訪問して世話をし、苦しい家計の中から長年にわたり家賃の援助を続けてやる隣人ジャンヌトンは、手足の麻痺に苦しむ老女である。非難されるべき怠惰な労働者に対峙して、努力をしても報われない生活弱者として描かれる。生活に十分余裕があるとは言えない状況にもかかわらず、ベルナル一家はやがて彼女を家に引き取り、家族同様に面倒を見ることになる。愛し合い助け合う「家族義務」は、家族外にも拡大されるべきなのだ。

家政書の末尾の部分には、家族の記録簿 (livre de famille) の抜粋が添えられている。新居に移った後、エスパンジェ夫人の提案により、夫婦は結婚や誕生など家族の重要な出来事を記録していくことにし、家長であるアンリが折に触れ家族の歴史を書き留めることになった。中・上流階層の家庭では珍しくなかったことかもしれないが、家族の過去を振り返り記録すること、すなわち家族の歴史を綴ること、そしてそれを次世代に残すこと、これは存続する家族の未来を信じる気持ちなしには成立しえない行為であろう。ブルジョワジーにとっては、勤労によって労働者家庭が健全な家計を維持し、次代の労働者である子どもたちを育て、それを長く安定的に維持し続けていくよう勤しむことは、社会全体の安定につながる肝要なポイントであったわけだ。しかし、大方の労働者家庭にとって、果たしてそれはどれほど現実的なものであったらうか。少なくともここで言えることは、理想的な労働者家族ベルナル一家を描く物語においてさえ、この理想的家族がそうした域に辿りつくのは、アンリが25年の長い勤めの後に職工長に昇進して明るい未来の保証が現実とは言えないまでも、ようやく予感できるようになった時だった、ということである。

2. 生活における経済設計の強調

『幸せな夫婦』の中で著者が特に重要視していると思われる家計について、ここ

ではその具体的な内容を取り上げ、この家政書が提示しようとしている「家庭経済の原理」を探りたい。

新世帯の準備

まず最初の章においてジュリーがとりかかるのが、新婚生活のための準備に関わる計算である。アンリとの結婚を決意するやいなや、結婚式費用や、新世帯のために購入しなければならない物品について、ジュリーはエスパンジェ夫人と検討にかかる。リネン類や花嫁衣装など、女性にとって気にかかる花嫁支度についての費目が細かく吟味されることになる。先行きへの不安から、ジュリーは結婚準備に金をかけず、できる限りの節約をして出費を減らしたいと考えている。しかし、夫人は節約は大事だが、家庭を持つのに必要な支出もあると主張する。白い花嫁衣装は無駄になるからあきらめようとするジュリーに、もはや使用人の身分ではなく、家庭婦人となるのだから、夫の体面や好みもあることだし、それにふさわしい装いや準備をすることも大切であると諭すのである。

結局、夫とその父がジュリーに着てほしいと望む白い花嫁衣装は、結婚後は濃い色に染め替えて無駄にならないように利用することとして、実現することになった。訪問用の衣装は特に作らず、流行にとらわれない上質の黒いドレスを作ることを夫人は強く奨める。また、テーブルクロス、ナプキン、タオルなどのリネン類についても、労働者家庭には贅沢品ではないかとためらうジュリーに、住居や身体を清潔に気持ちよく整えるためには必要なものであるという夫人の意見で、最低限の数を揃えることにした。衣服を汚さないために大小のエプロンや布巾も必需品である。衣装もリネン類も既製品の方がかえって安くつく場合もあるが、既製品は品質が良くないので、必要なだけの生地を買って自分で作るのである。このとき、花嫁支度に必要な支出としてジュリーとエスパンジェ夫人が試算した予算は、以下の通りである。

シーツ上下 (14f.) 4組	56 f.	
テーブルクロス (4f. 50c.) 3枚	13	50 c.
食卓用ナプキン12枚	10	
洗面用タオル12枚	6	
台所用エプロン (1f.) 6枚	6	
ドレス用袖覆い付きエプロン4枚	14	50
エプロン用小物	2	

白生地とリボン（花嫁衣装）	50	
黒服用生地	50	
家具類	400	
カーテン，絨毯	72	
合 計	680 f.	

※本論で掲げたこの収支表は、ベルナール夫婦が書き留める家計簿の表記形式に則ったものである。

これだけでもジュリーには途方もない額に思えた。ジュリーが600フラン、アンリが700フラン、合わせて1300フランの貯蓄が若い二人の持つ全財産である。全財産を結婚のためだけに使い尽くすわけにいかないことは無論のことである。結婚披露宴の費用はジュリーの両親がその日のためにと貯蓄した金を出してくれることになったが、ジュリーは両親に負担をかけないよう質素な披露にとどめることにした。ここで、披露宴や花嫁衣装に金をかけすぎて肝心の生活資金に事欠き、食費にも困るようになる夫婦のエピソードが、夫人とジュリーの会話の中で引き合いに出される。新生活準備の投資対象として最優先されるのは、生活の基盤を整えることである。祝宴への身の程知らずの浪費こそ、結婚後の困窮につながるのである。

この試算を行ってから6週間後にジュリーとアンリはめでたく結婚する。しかし、結婚三日目のまだ落ち着く暇もない新婚夫婦が紙とペンを取り出して始めたのは、新世帯準備のためにかかった支出の計算であった。二人が数え挙げた支出項目は以下の通りである。

家具類	ベッド	50 f.	
	箆筒	40	
	方形テーブル	10	
	ナイトテーブル	10	
	整理箆筒	60	
	食器棚	15	
	椅子（1脚4f）6脚	24	
	台所テーブル	6	
	イ草張りの木の椅子2脚	4	50 c.
	合 計	219 f.	50 c.

寝具類	マットレス台	40 f.	
	マットレス	60	
	枕 (一つ10f.) 二つ	20	
	長枕	10	
	毛布	15	
	木綿掛け布団	9	
	インド更紗40m (ベッド・窓カーテン用)	40	
	モスリン 5 m (カーテン用)	2	
	合 計	196 f.	

台所用品	陶製の水差しと洗面器	3 f.	25 c.
	コーヒー漉し器	1	50
	銅製片手鍋	5	
	鉄製片手鍋	1	75
	鉄製深鍋	3	25
	小型の鍛鉄片手鍋 (小)		50
	〃 (大)		75
	ミルクポット		40
	スープ用ポット		60
	褐色と白の陶製の大皿		90
	陶製の大深皿	1	
	陶土のビュアール (buard)		90
	木の手桶 (一つ1f.50c.) 二つ	3	
	木の匙二本		25
	金属の匙 (一本50c.) 6本	3	
	金属のフォーク (一本50c.) 6本	3	
	アイロン (一つ1f.50c.) 二つ	3	
	洗濯用の大平鉢 (一つ1f.25c.) 二つ	2	50
	陶製のスープ皿 6枚	1	20
	陶製の平皿 6枚	1	20
	コップ 6脚	1	20
	鉄製フライパン	1	50
	箒 (黍毛)	1	

箒（馬毛）……………	2	75
ブラシ，羽箒各1……………	1	85
合 計……………	45 f.	25 c.

これらにジュリーの新調した衣装代とリネン類の費用が加わる。また，台所のかまど，ベッドとテーブル用のラグのことを忘れていたことにも気づいて，これらを入れて合算してみると，二人の結婚のための支出総額は次のようになった。

家具類……………	219 f.	50 c.
寝具類……………	196	
リネン類……………	108	
かまど……………	40	
台所用品……………	45	25
ラグ……………	15	
花嫁衣装……………	50	
黒いドレス……………	50	
合 計……………	723 f.	75 c.

さらに，アンリがジュリーに贈った指輪などの装身具にかかった費用がある。アンリはこれについては，150フランを越えないようにするという，あらかじめ立てた予算の枠内に支出を取っていた。

装身具	結婚指輪二つ……………	24 f.	
	宝石付き指輪（エンゲージリング）…	15	
	イヤリング……………	30	
	ブローチ……………	20	
	ショール……………	60	
	合 計……………	149 f.	

結局，費用を総計した結果は872フラン75サンチームとなった。二人の所持していた資金の総額はちょうど1300フランであったから，427フラン75サンチームが手元に残っているはずである。さっそく二人は財布の中身を勘定したが，残金は419フラン60サンチームしかない。8フラン15サンチームの不足をめぐって二人は記憶

をたどり、礼服の手袋代6フランと、正確な額は忘れてしまったが、結婚式の日に軽い食事をとっていくばくか支払ったことを思い出す。食事代の2フラン15サンチームは仕方なく雑費として処理することにするが、ジュリーはこのことで、たとえ1サンチームの支出に対しても注意深くあらねばならないと、節約の思いを新たにするのであった。

6週間前にジュリーとエスパンジェ夫人が行った結婚準備のための試算は680フランであったが、それは家具、リネン類、衣装に費目が限られたものであった。その費目に関する実際の支出額合計は、上記の表から数字を拾うと638フラン50サンチームとなる。アンリの父が家具職人であるため、家具の費用がかなり削減できたのである。しかし、かまどと台所用品の合計85フラン25サンチームについては、試算に入っていなかったため、結局、当初の予算を越える支出が結果的には生じてしまった。ジュリーは、多くの出費を招いてしまったことに心安らかではない。堅実な予算を立てることの意義を教示するための家政書で、なぜこのような単純な誤算をわざと描いたのであろうか。著者の意図ははっきりとはわからない。結婚のような大きな行事について予算を立てる際には、予期していないような大きな出費もついつい起こりうるから、とりわけ慎重でなくてはならない、ということを強調したいがためであったのだろうか。

日常生活の経済設計

二人の資金の残金はすべて貯蓄銀行へ預けることにし、次に、ジュリーとアンリはこれからの暮らしのことを考えることにする。暮らしの予算計画を立てるのだ。まず収入だが、アンリの日給は4フラン、毎月25日働いたとして月収は100フラン。彼の場合、家で内職をしてさらに25~30フランほど稼ぎを増やすことが可能である。ジュリーの方は、針仕事でもらえる日給が1フランなので、同じく25日働くとも月収は25フランとなる。従って、夫婦の収入は合わせて月に125フランが確実なところである。25日間の収入で30日間の支出を賄うわけで、1日の予算の目安は14フラン16サンチームと1/2となる。しかし、31日の月も年に7回あるわけだから、これは予算としては甘い見積もりであるとしなくてはならない。ジュリーとアンリはこれからの生活の厳しさを1日当たりの予算額によって認識する。

必要な支出の第一は住居費である。二人の新居である小さなメゾネットの家賃は年120フランで、これに保険、修繕費、庭で栽培する植物の種代などを合わせると、1日あたり40サンチーム(年144フラン)の支出となる。食費、光熱費を加えた1日の必要経費の見積もりは以下の通り2フラン80サンチームなので、1日3フラン

を見ておけば十分ということになる。

住居費		40 c.
食費	2 f.	
光熱費	暖房・調理	25
	灯油	15
合 計	2 f.	80 c.

月に換算すると90フランの生活費が計上され、これに月単位で必要な経費として、万が一の傷病時についての保障を得るための社会保険費2フラン、洗濯・アイロン代の2フランが加えられて計94フラン。おおよそ100フランあれば何とか暮らしていくことはできそうだという見積もりが出た。収入が125フランであるから、月に20フラン程度の貯蓄も可能となる計算である。これにアンリの内職から得られる収入を加えれば、さらに貯蓄額を増やせるかもしれない。だが、生活を楽しむためには、衣料費と娯楽費のことも考えねばならない。娯楽に費用をかける必要はなく、家族が共に過ごすことができ、休みの時に読書や散歩が楽しめればそれで十分であるというのが二人の一致した考えだが、衣服費の方は無視できない。予算計画としては、ジュリーの収入とアンリの内職からの収入を合算し、その半分を貯蓄に、もう半分を衣服や住居の費用に充て、書籍の購入や貧しい人のための慈善のためにも使おうということになった⁽⁵⁾。

しかしながら、頭に描いたように予算通りの家計を実現するのは決して易しいことではないということにジュリーはすぐ気づくこととなる。日常の支出の大きな部分を占める食費が問題であった。夫が舌鼓をうって喜ぶ顔を見たいあまり、ついつい肉やバターを買ってしまうと、1日の食費の予算2フランを軽々と越えてしまうのだ。エスパンジェ夫人はジュリーに生鮮食料を農家の売る市場で安く手に入れる方法を教え、安い部位の肉や魚、野菜を用いた経済的な料理のレシピを綴ったノートを与える。美味しくてしかも費用のかからない献立をたくさん覚えれば、1日1フランで食費を賄うことも不可能ではない。また食糧の様々な保存法を覚えれば、

(5) 結局、夫婦が貯蓄できた額は、結婚1年目が100フラン、2年目が87フラン、3年目が132フランであった。1年100フランだと月に8フランほどの額になり、期待をはるかに下回るものである。アンリの定収入以外の夫婦の収入が予算で立てたほど多く得られなかったのか、あるいは子どもの出産(2年目)など予想外の出費がかかったのか、いずれにしても、このことは予算の完全な実現が難しいことを示唆するものであろう。

安い出盛りの時期にたくさん購入しておいて、長期間食卓を賑わせることができる。庭の菜園の作物や野外で見つけた野草などを用いて、季節感を味わうこともできる。夫のために、自家製のビールやシードル、果実酒などを安く作ることも結婚早々にジュリーが覚えたことであった。結婚1ヶ月目のアンリとジュリーの食費支出一覧は以下の如くとなった。ジュリーの奮闘努力の甲斐あって、60フランという予算内に支出を収めることに見事成功したのだ。もしそうでなければ、この月は、アンリの内職仕事の収入とジュリーの針仕事が当てにしていたほど入らなかったの、二人にとって不幸な事態になるところであった。

食料品	単位当たり	1日当たり	1ヶ月当たり
パン	45 c./kg	60 c.	18 f. (40 kg)
牛乳	25 c./リットル	22	6 f. 60 c. (26リットル)
肉屋の肉	1 f. 70 c./kg	43	12 f. 90 c. (7.5 kg)
バター	3 f. 20 c./kg	16	4 f. 80 c. (1.5 kg)
油脂	1 f. 80 c./kg	3	90 c. (500 g)
卵	90 c./ダース	6	1 f. 80 c. (2ダース)
ハム・ソーセージ・魚		8	2 f. 40 c.
野菜・果物		15	4 f. 50 c.
乾物 砂糖	95 c./kg	} 11	} 3 f. 30 c.
塩	20 c./kg		
胡椒	25 c.		
粗糖	25 c.		
未焙煎コーヒー豆	1 f.		
オイル・酢	65 c.		
ワイン	60 c./リットル	8	2 f. 40 c. (4リットル)
ビール	30 c./リットル	4	1 f. 20 c. (4リットル)
合計		1 f. 96 c.	58 f. 80 c.

ジュリーは支出帳に食費の始末の工夫についていろいろと書き添えている。1日2フランの食費予算からたった4サンチームでも節約できれば、1ヶ月に1フラン20サンチーム、1年で4フラン40サンチームを残すことができる。日々の非常に小さな努力の積み重ねが、時を経て、十分な報いを与えてくれることが強調される場所である。浪費を抑えることは金を貯めるだけが目的ではない。最初買った乾物類は1ヶ月目に半分しか消費しなかったの、次の月にはその金で夫のためにもう2リットル多く、あるいはもっと上等のワインを買うことができる。菜園の野菜を使うことで節約できた分は、肉の量を少し増やすのに使うことができる。賢い節約が、家族の食事の楽しみを増してくれもするのである。

夫婦の生活設計は消費面だけにとどまらない。支出を削減するだけでなく、収入

を増加する努力を怠らなかつたことも、ベルナール夫婦の生活設計を成功に導く大きな要因であろう。結婚後3年がたち、二人の子どもが生まれ、それにつれて出費も当然嵩むことになり、これまで貯えた預金を取り崩さねばならないかと頭を悩ますアンリだったが、これに対し、ジュリーは新たな収入を得る方策を提案する。小さな子どもを抱えていては、縫い物や刺繍の仕事を今以上に増やすことはできないので、それより実入りのよい洗濯の仕事を増やすことにするというものだ。高級な薄物の洗濯は良い収入になる。今はそれを週2日しかしていないが、週4日に増やし、庭で育てている果物や野菜も売りに出せば、さらに稼ぎを増やすことができる。この相談をした翌日、善は急げとジュリーは朝早くからヘリオトロープを庭で摘んで花屋に売りに出かける。花屋は1フランで花を買ってくれて、これからも庭の花を、特に早咲きのものを買う約束まで取りつけることができた。春の花や野菜の売り上げ、さらに洗濯仕事の増収は、3ヶ月間で120フランもの利益をジュリーにもたらしてくれたのだった。4年の時が過ぎて二人の子どもがさらに増えたが、ベルナール家の家計は危機に陥ることなく、むしろわずかながらも徐々に貯蓄は増えていった。さらに、愛する子どもたちのためには、各自が生まれたときに夫妻は5フランの口座を作ってやり、毎月25サンチームずつの積み立てを行うことを欠かさなかつたのである。

結婚して9年後、アンリの昇進の話が持ち上がり、大きな家に住み替えて老親やジャンヌトンと同居することにしたベルナール夫婦は、大きな生活変化を前にして家計収支の計算を行う。アンリの収入は昇進によって月200フランとなる。ジュリーの収入も順調で月100フランを維持している。同居することになったアンリの父は20フラン、ジャンヌトンは2フラン、それぞれ毎月の生活費を出すと言って聞かない。夫婦は初めは断つたものの、老人たちの気分を害しないようにやむなくそれを受け取ることにする。ジュリーの母は農場の仕事はお手の物であるから、果樹や野菜、家禽を育てて、収入を増やすための大事な戦力になってくれるだろう。1ヶ月の収入合計322フランに対し、書き出された支出の予算は下記の通りである。

家賃	25 f.	
新しい家の保険		40 c.
社会保険	3	
暖房光熱費	15	
子どもたちの貯金	1	
衣料費	50	

食費.....	200	
合 計.....	294 f.	40 c.

家賃の約2倍の値上がりを始めとして、すべての費目の支出は結婚直後より当然大きくなっている。成長する4人の子どもたちにかかる衣料費、特に靴代には頭を悩ますところである。それまで、アンリとジュリーは貯金を取り崩すことは絶対にせず、年に100フラン程度の貯蓄を続ける努力をしてきた。昇進してアンリの給与が増えたと言っても、家計の黒字はさほど大きいものではなく、食費の200フランを節約するしか、蓄えを増やす道はなさそうな状況である。昇進と転居は、ジュリーとアンリにとってすべてを解決する鍵とはならず、大世帯を抱え、新たな経済的試練を与えるものであることを夫婦は改めて認識し、ジュリーは自らいっそう休む間もなく働くことで何とかこの困難を乗り越える決意をするのである。そしてそれは、11年——子どもたちの病気やアンリの事故など決して平坦な年月ではなかったが——の後、この「幸せな夫婦」にもたらされた愛する家の所有権の獲得という報いによって、見事に結実することとなるのである。

まとめにかえて

『幸せな夫婦』に登場する理想的な労働者家庭モデルの根本にまず存在するのは、愛し合い支え合って家庭を築く夫婦の姿である。貧しいけれども幸せな愛の巣、そこにやがて子供が生まれて、家族愛は増幅されてゆき、年老いた老親、哀れな隣人を引き寄せて守る求心力をも持つことになる。そして、愛だけではなく、そこには勤勉と節約があることは言うまでもない。さらに、収支バランスという経済秩序を何より重視し、貧しい労働者家庭にも財産形成を可能とする冷静な経済感覚が求められる。

しかし、女主人公ジュリーは、最初、結婚に必ずしも前向きであったわけではなく、むしろ経済的に貶められることになるのではないかという抑えがたい不安を露わにしてみせる。最初の章の、エспанジェ夫人に結婚を相談する場面では、そのようなジュリーの不安が随所に顔を見せるのである。安定してはいるが愛のない結婚や、結婚しないという選択も、ジュリーには可能であった。ジュリーのように、比較的安定した職を持つ労働者階級の未婚女性にとって、自らの確実な収入を失わせ、夫に経済的に依存した形で世帯を持つことへの不安が、真に大きいものだったとすれば、その不安を克服して女性たちを新生活へ歩み出させるために必要な特効薬は、愛情深く働き者の夫と、現実的かつ堅実な生活設計のセットであったと思われる。『幸せな夫婦』の差し出す家族モデルと経済原理は、まさにその特効薬そのものであると言って差し支えないだろう。